

東北アジアに拡がる在日朝鮮人を基点とした

親族関係に関する文化人類学的研究

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻

博士後期課程3年（助成時・現在）

竹田 響

研究の背景と目的

本研究の目的は、第二次世界大戦を起因として、その後国民国家の対立に翻弄される中で親族と離散することとなった在日朝鮮人が構築している親族ネットワークに着目し、日本・大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国を含む東北アジア地域において、国境を越えた親族関係がどのように構築されているのかを明らかにすることである。

私が研究の対象としている在日朝鮮人と呼ばれる人びとは、日本の植民地支配に端を発して当時の日本内地に移住した人びととその子孫である。在日朝鮮人の94%以上は地理的に近い朝鮮半島の南側に自身の出自を持ち、北側から日本に渡ってきた人びとは6%弱に限られる（Ryang, Sonia (1997) *North Koreans in Japan*）。移住当時、朝鮮半島は大韓帝国と呼ばれる一つの国家によって統治されていたが、1948年に半島の南側に大韓民国が、北側には朝鮮民主主義人民共和国が建国された。第二次世界大戦終戦後、大韓民国では朴正熙による軍事政権が敷かれ、日本に暮らす日朝鮮人に対しては「棄民政策」と呼ばれる無関心政策を推進、一切の支援は行わなかった。一方の朝鮮民主主義人民共和国では金日成のもと、1957年から「教育援助費」と呼ばれる支援金の贈与を開始、その後1959年から1984年にかけて、日本に暮らす日朝鮮人の北朝鮮への「帰国事業」が行われた。その結果、元々の出自が朝鮮半島南部にあった在日朝鮮人の離散が朝鮮民主主義人民共和国にも広がった。

大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国は建国以来、相手国について国家として長らく承認せず、今日においても国境を跨ぐ人びとのやり取りは一般に許可されない。また日本と朝鮮民主主義人民共和国間は国交がないばかりか、日本国内では長らく拉致・ミサイル・核の議論に終始し、今日まで続いている日本と朝鮮民主主義人民共和国に暮らす人びとの繋がりについては一切の研究がなされてこなかった。また「帰国事業」についてもジャーナリズムや歴史学の観点からその経緯が明らかとなってきたものの、「理想郷と騙され帰国した人びと」（小島晴則 2016『帰国者九万三千余名最後の別れ—写真で綴る北朝鮮帰国事業の記録—』）など事業の批判に終始し、その結果、国境を跨いで離散することとなった人びとの繋がりについて研究が行われてこなかった。

このような状況の中でも、日本海／朝鮮東海を跨ぐ形で拡がる親族関係が50年以上に渡って拡がっている。祖先祭祀や墓、親族間でのモノのやり取りがどのように行われてきているのかを文化人類学的観点から調査することによって、人びとがいかにこれまで生活圏を構築し、今日どのように構築しているのか、また今後どのように変容する可能性があるのか、過去・現在・未来の3つの時間軸から考察することが可能になる。この点を明らかにすることが本研究の目的である。

調査概要

調査は文化人類学的手法に基づくフィールドワークを軸に、日本と朝鮮半島に国境を跨ぐ形で親族が離散している人びとを対象として実施した。助成期間中に、

1. 調査対象者がどのように親族間での連絡を取り合っているかに関する参与観察ならびにフィールドワーク
 2. 冠婚葬祭などの親族内行事における参与観察
- を合わせて行った。

結果と考察

親族関係が国境を跨いでおり、かつ簡単には行き来ができない国境線もあることから、親族関係が途切れてしまっている人びとがいる一方で、そのような中でも今日まで親族関係を保ち、連絡を取り合っている人びともいた。

第二次世界大戦後、日本と朝鮮半島に親族が跨って暮らす人びとは、南か北か、というように二分法的な枠組みの中で語られ、長年に渡って、時には国家や民族組織によって、また時には研究者によって、南北どちらか一方の選択を強いられてきた。しかし、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の「どちらの側」にも親族がいる人びとが築いてきた親族関係が日本と朝鮮半島の間にはこれまでも確かに存在し、また今日においても更新されていることが明らかとなった。また、親族の中の移動と離散の記憶についても世代を越えて継承されようとしていることが、本調査を通じて明らかとなった。

これらの人びとの国境を跨いだやり取りは、これまでも長年に渡って行われてきていたにも関わらず、今日まで学究の対象にすらされてこなかった。そこには二つの理由があろう。一つは、朝鮮半島の南北双方を共に捉えようとする視点が欠落しており、またそこに広がる親族関係を想像することをしてこなかった、自身の出自を気にしなくてよいマジョリティ側の人びとの姿勢である。そしてもう一つは、国境を跨いだ親族関係を有していた在日朝鮮人自身も、周囲のマジョリティ側の人びとに対しては、その関係を特段語ろうとはしてこなかったからである。語っても理解がされないどころか、「北朝鮮」に親族がいることを日本社会のマジョリティ側が知った場合、決して自ら「会えない」状況を望んで創り出した訳ではなく、むしろ国家によって「分断」された状態を解消して欲しいと願っているにも関わらず、時には好奇の目で、時には嫌悪の眼差しすら向けられる、そのような状況が今日も続いている。このような中で、ポリティカルな対立だけではない、日本社会において親族が離散している状況そのものが理解されないという心理的な葛藤が合わせて生み出されていた。

謝辞

本調査を遂行するに当たって、お話を伺わせていただいた皆様に心から感謝を申し上げます。加えて、本研究助成なくして調査を遂行することはできませんでした。この場をお借りして、深く御礼申し上げます。